

國學院大學学術情報リポジトリ

ひとりで行けばよい

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-02-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神長, 英輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001382

【巻頭言】

ひとりで行けばよい

神 長 英 輔

序

國學院に職を得てから、まだ教室で授業をしたことはない。オンラインでの授業は予想以上に充実しており、学生や院生のみなさんとのさまざまな形でやり取りから日々多くの知的な刺激を受けている。もとより私は学生や院生が教員に知的な刺激を与えて「教員を育ててくれる」ものだと思っているので、この半年はそうした「育てられる」ことの幸運をしばしばかみしめてきた。

本誌の編集担当の方からこの巻頭言を書くよう依頼を受けた際、引き受けることをすぐに決めたものの、その時点で何を書くべきかのあてはなかった。授業や論文を見る限り、國學院の院生の研究の水準はかなり高く、しかも知的な関心は私が専攻するロシア近現代史や日露交流史からは遠いように思われた。しかし、あらゆる論文や発表は読み手や聞き手に対する何かしらかのささやかな贈り物であるべきだと考えているので、書くからには、みなさんの興味を引き、みなさんの助けになるようなことを書けないかと思いをめぐらせた。

そうして思いついたのが、以下の内容である。研究者にとっては時間こそが最大の資源である。ここまで読んで、あるいはこの先を読み進めて興味がなかったら、遠慮なく読みとばしてほしい。

1 現場

私は図書館や文書館が好きで、住めるのであれば住んでみたいと思うくらいである。薄暗く、空調もたいして効かず、ほこりやカビの匂いが漂う書庫の中でも充実感が得られ、ずっとここにいたいと思うことが多い。歴史学は文書資料に基づく学問なので研究作業の大半はどこかの机の上でなされる。そのことは承知であえていうが、机を離れて外に出ることが重要である。どんなに歩き回っても過去に行くことはできないが、それでも現場を見ることを勧めたい。

現場や現物を見ることで資料の読み方が変わる。これが「外に出る」ことを勧める最大の理由である。

私は研究上の関心があるサハリン島（樺太）に1年間ほど暮らし、島のさまざまな

町を訪れ、いろいろな人と話した。シラカバやカラマツの森を歩き、山に登ってギョウジャニンニクやハナウドを食べ、石油の味がする鉱水を飲み、泥炭の湿地に湧くぬるい温泉につかった。私は出不精なので、誘われたら断らないことにしたのがよかった。歩き回っていた時は若かったので、研究のアイデアはさっぱり出なかった。しかし、その後、ロシア帝国統治下のサハリン島の史料を読み、日本領樺太の史料を読み、1945年8月の日ソ戦の史料を読んでいく上で、この経験が役に立った。

サハリン島西海岸のホルムスク（ロシア帝国期のマウカ、日本領時代の真岡）という地名が出てくれば、間宮海峡の水平線と町の背後に広がる段丘が目に浮かび、町外れのクマザサの草いきれや潮の香りが思い出された。北の果てのオハという地名が出てくれば、静かに動く油井、団地の壁に描かれたレーニンの肖像画、砂漠のような不毛の土壌、親切にしてくれたニヴフ人の店主の笑顔が思い出された。日本領樺太の中心だった「豊原駅」と出てくれば、夕陽の中で家路に急ぐ人が行き交うユジノサハリンスクの駅前が思い出された。

こうした情報は文書資料では捨象されるのが普通である。だから、感覚や感情を伴う情報を経験として持っている、史料の解釈の可能性が広がる。実際に見たからこそ、私は19世紀末の華北で売られていた干しコンブの巻き方が21世紀のサハリン島の市場のコンブと同じ形だったことに気づき、そこから想像力と研究の可能性を広げることができた。

あてがあるのかないのか、わからないままにそぞろに歩くのが楽しい。歩いているうちに、磁石につく砂鉄のように研究の種が自分の体に飛び込んでくる。とにかく歩けばよい。

歩きながらいろいろなことを考える。血行がよくなるからか、研究のよいアイデアがしきりに頭に浮かんでくる。自分の頭に思いついたことは大事に記録しよう。授業でもそうだが、自分で思いついたことや考えたことこそを積極的にノートに取ろう。自分のアイデアは自分が書きとめない限り、すぐに蒸発して消えてしまう。

大学院生のみなさんも忙しいだろう。将来の不安もあるし、学位論文には年限が定められているし、生活費を稼ぐ必要もあるだろう。それでも人生の中では比較的自由に研究に時間を割くことができる時期である。時間の資源を味方につけ、大したあてもないままに歩き回ってほしい。研究はやたらと時間がかかるもので、効率化とか投資とか回収とか競争とか、ビジネスの概念は歴史の研究に縁が遠い。無駄を恐れず足を踏み出せば、世界は開ける。

2 言語

大学でロシア語を15年ほど教えてきた。趣味らしい趣味はないのだが、あえて言う

なら語学が趣味だ。大学生からいろいろな言語をかじってきたし、今でも語学は好きである。

いっぽう、言語をしっかり修めたという気はしない。いまだに達者に使えるわけでもない。研究の都合上、ロシア語と英語を使うことが多い。辞書を多用すれば、中国語の論文はなんとか読める。韓国語も少しは読める。ロシア語や英語では論文を書いたこともあるし、口頭の研究発表の経験もある。前職では同僚のロシア人とロシア語で話し、ロシア語でメールをやりとりし、他の同僚と英語でやりとりする機会も多かった。コロナの流行以前は足しげくロシアにも出張していた。

ロシア語や英語が上手になったという実感は得たことがないが、それでよいと思っている。話すときは自分の現状の力で話すしかない。それで力不足ならばまた学んで練習して力をつければよい。研究も語学も終わりはないので、思い悩まずただやればよい。

語学の敵は「やめてしまう」ことである。私は怠け者だし、たいした努力もしてこなかったけれども、大学入学からロシア語をやめなかったのは確かである。思うように話せなかった経験ばかりが積み重なってくじけてばかりだったが、年の功はあるもので、「うまく話せないのが当たり前で、母語ではないのだから上手に話せるなどというのがおかしい」との考えを抱くに至って心が穏やかになった。

研究もそうだが、他人と比べてはいけない。他人との比較はいばらの道にみずから分け入るようなもので、百害があつて一利もない。間違いを恐れず下手でも堂々としていれば学習は続けられるし、学習が続けば昨日より今日はいよくなる。なかなか学習の機会がなければ、日本を出てみればよい。自動的に楽しい語学学習ゲームが始まる。

上でも述べたとおり、私は出不精だが、語学のおかげで世界が広がった。ロシアでも中国でもあらゆるところで見知らぬ人々の優しさにふれ、人間の情の変わらなさを知り、同時に自分の常識の狭さを感じた。世界の広さと深さを感じたのである。大学に入ってから日本のあちこちを旅行したが、ロシアや中国への旅行からは国内とは比べものにならないほどの刺激を受けた。情報化と情報通信技術のおかげで海外旅行の障害は小さくなった。コロナの流行で海外旅行の見通しは立たないが、ゆくゆくは行き詰まっても行き詰まらなくても機会を探し、日本を出て遊びに行くことをおすすめする。

学問の上でも語学は自分の世界を広げてくれる。私は日本文化が好きで、日本の暮らしも好きだ。日本に対する学問上の関心も大いにある。だからこそ、日本語以外の言語で書かれた日本についての研究はとても興味深い。外国に暮らして旅することで、日本のよさがわかるし、外国のよさもわかる。そうしたものの見方は日々ものを考え

る上での助けになり、自分のふだんの生活も研究生活も豊かにしてくれる。

世界の広さと深さを知ると、自分の視界が広がり、心が豊かになる。自分が抱える人生の悩ましさが失せるわけではないが、多くの悩みが思っていたよりも小さかったことには気づける。悩んだら旅に出よう。

3 研究の「空気」は読まない

出世の道を説くわけではないが（私にそれができるとも思っていないが）、大学院から先の研究生活においてまわりのさまざな人とうまくやっていくのは重要である。大人どうしの関係において重要なのは「仲が悪くならない」ことであって「仲良くなる」ことではない。とはいえ、約束を守るとか、悪口を言わないとか、人と競おうとしないとか、ふつうの常識的なことができていれば問題はない。私は人付き合いがうまい方ではないが、自分からどんどん人の輪に飛び込んでいくわけではないので、ひどい失敗は少なかった。いっぽう、私は研究発表や執筆を気軽に引き受けることに決めていたので、出不清の口下手でも内外のいろいろな人と縁ができ、それが続いている。人付き合いが下手でも研究の世界で生きていくことはできる。

研究の内容において「空気」を読む必要はまったくない。むしろわがままに進むべきだ。今どきの大学の多くの教員は学生の自主性を尊重してくれる。しかし、研究の道に踏み出したばかりだと、学問の世界の底の深さがなかなか実感できないまま、よくありそうなテーマから自ら足を踏み出すことが難しい。自分で自分の可能性を縛ってしまうのだ。このことはみなさんにも実感してもらえらるだろう。

私は足を踏み出すというより、踏み外し続けて今に至っている。器用さがないので、自分の興味のあることしか研究できないだけなのだが、結果としていつも研究史全体の中の辺境に流れつき、それに居心地の良さを感じてしまう。

研究の自由さとは自分の思い込みからの自由である。かつての私は日露関係の歴史とは政治と外交の歴史だと思っていたが、その外で自由に動き回る漁民の活動を知り、考えが変わった。

研究の方法の豊かさを知ること重要である。大学院の時に読んだ専門外の分野の読書は今でも役に立っている。専門外の研究に触れて研究の方法の豊かさを知っておくと、自分がやろうとしている研究の限界が見え、やるべきことが見えてきて楽になる。限界が見えるからこそ、その枠の中でできることも見える。

新しい研究に踏み出すのは勇気がいるが、楽しくもある。専門外についての教養的な知識は新しい研究に踏み出す際に背中を押してくれる。興味のおもむくままに読む経験を重ねると、本を選ぶ技術も身につく。人生の時間は限られているので、本を選ぶ技術は必要だ。

私の場合、料理と食が研究のひとつの鍵になってきた。サハリン島に住んでいた時には市場や食料品店を見て回るのが好きだった。土日は街を歩いてさまざまなものを買ひ、自宅で調理した。あらかたは自分の腹に収まったが、時にはロシア人の知人にふるまうこともあった。現存している食文化の中にはさまざまな歴史の地層が見え隠れしている。この地域ではなぜそれを食べるのか、食べないのか。どうしてそのような食べ方をするのか。その食べものはどこで採られ、作られ、どのように運ばれてくるのか。ふだんの生活での経験が知的好奇心の入り口になると、史料の読み方も変わる。想像力が資料解釈の可能性を広げてくれるのだ。

結

大学で常勤の職を得る前は東京郊外の調布市に住んでいた。近所には『ゲゲゲの鬼太郎』の水木しげる先生が住んでおり、近所で散歩中（あるいは仕事場への出勤中だったか）の水木先生をよく見かけた。そんな縁もあってか当時、水木先生のマンガをよく読み、味のあるエッセイもよく読んだ。

水木先生のことばに「好きの力を信じなさい」というのがある。私はこのことばを助けに研究生生活を泳いできた。研究の最大の敵は飽きだと思う。自分の好きなこと、気になること、おもしろいことをしっかり感じとっていれば、飽きずに続けていくことができる。水木先生は「努力は人を裏切る」とも言っている。このことばも重い。努力をけなしているわけではない。努力が報われるとは限らない、それを覚悟してことに当たれというのである。だからこそ「好きの力」が支えになる。

水木先生にはほかにも「怠け者になりなさい」や「のん気にくらしなさい」などの名言がある。いずれもたやすくできそうだが、せわしい現代ではかなり難しい。忙しさに「かまけて」しまうと、心がむしばまれてしまう。重いことばである。

大学院で学ぶ時間は「好き」をしっかりと見極めるためにある。研究テーマは変えてよい。道は踏み外してよい。研究はうまくいかないのが当たり前だから、できが悪くても堂々としていけばよい。どうしてもできないことはやめてよい。道連れがいらないならひとりで行けばよい。